神山の皆さんと KAIR

2019年招聘アーティストと共に小野さくら野舞台に見学に訪れた様子。
左から小川一清さん、5番目前列が賀代子さん

神山町には江戸後期から明治〜大正時代にかけて制作された、1,459枚（県内最多）の舞台の背景画「襖絵（屏風絵）」が現存しています。これらは、招待作家として招かれた絵師たちが、庄屋や富豪の屋敷に滞在しながら、地域住民の協力のもと制作したものです。実はすでに19世紀半ばにこの町で、アーティスト・イン・レジデンスが盛んに行われていたというわけです。

神山町の小野地区に現存する農村舞台「小野さくら野舞台」では、毎年春に公演が開催されています。KAIRで神山を訪れるアーティストたちは、小野さくら野舞台の見学を楽しみにしており、そこからインスピレーションを得て制作された作品も複数あります。

いつもアーティストを温かく迎えてくれる「小野さくら野舞台保存会」の代表の小川夫妻にお話を伺いました。小野さくら野舞台とアートの関係はどこから始まったのでしょうか？

「2001年に東京藝大の教授と学生が神山に調査研究に来ていて、小野にある野舞台の価値を再発見して認めてくれたことで、古びた建物という舞台についてのマイナスの面しか見られなかった自分達の見方が変わりました。アートに関わる人々がありのままの農村舞台に価値を見出してくれたことが、再開するきっかけとなったんです。」

その後もやれることをやろうと少しずつ歩んできたそう。そして2007年の復活公演をきっかけに、小野さくら野舞台がある天王神社の山桜の木の下で開催される春の公演が、毎年開催されています。

「招聘アーティストが神山に到着して、1番に見学に来てくれることがとても嬉しい。彼らとの交流を大事にしています。」

2008年、2009年には招聘アーティストのアンドレア・デジョー、アダム・アヴィカイネンが襖作品を制作しました。でき上がった作品は、毎年小野さくら野舞台の公演で、古い襖と共に利用されています。

「古いものばかりだった襖絵が、アダムとアンドレアの作品との対照的な魅せ方が追加されたことで、新しい風を吹かせてくれて、襖絵の可能性がさらに広がりました。新しいけれど、古いものと馴染む、どんな演目にも合う襖絵。昔は農村舞台と言ったら、人形浄瑠璃と襖絵だった。それを臨機応変に、人に助けられながら、様々なアートや芸能やプログラムを取り入れて、色々なやり方で、時代に合わせてこれまでやってきたことが非常に良かったと思っています。小野さくら野舞台はアーティストと一緒にやってきた。やっぱり小野はアーティストと。これからも一緒に進んでいくんだと思います。」

「すべては“人”。神山が時代を先取りする町になれたのは“人”がいるから。」

アダム・アヴィカイネン　<<台風カレー・地殻ラザニア>>
2009　撮影：小西啓三

連載1　ほんのひろば

＼楽しいよ！コーヒーとほんのひろば／

6月から月に一度のイベントを始めました。
ほんのひろばは、本と利用者の皆さんが良い距離感で過ごせるようにと整備を続け、おかげさまで少しずつ進化してきているのですが、その日はそこにさらに豆ちよ焙煎所さんのコーヒーが寄り添ってくれるという、とってもスペシャルなイベントとなっています。
このイベントでは、差別と人権に関する選書や朗読を行ったり、女性をエンパワメントする本を紹介したり、自分の意見を書いたフリーペーパーを町のみんなで作ったりもしています。お気軽にお越しください。
次回は、8月23日（日）開催です。

連載2　GVメンバーリレー

河野 定子

（NPOグリーンバレー神山町農村環境改善センター指定管理、ほんのひろば）

今年の神山は雨が多かった梅雨を超え、セミの鳴き声が元気な季節を迎えました。個人的意見ですが今年はムカデ発生率が高く感じられ、夜中に怒りを表したムカデにこの歳になって初めて遭遇し、こちらもパッチリ目が覚めて朝を迎えました。この夏は日本のいろんなところで災害とコロナの再発生。ただならぬ日本を感じながらも周囲は緑が生い茂り、家も仕事も草取りに忙しく時世を忘れられるので、やはり神山には平穏な時間が流れているかな?と思います。ここで生まれて育てていただいている町。この職場で働いていると、新しい発見と出会いがあったり、懐かしいものやことに遭遇できたり、毎日のスピードは速い気がします。今年の夏、一番賑やかな動きをしている本と虫と草に追われながら、ここで出会う人たちと楽しく気持ちよく過ごせる時間を大事にしていこうと思っています。

表紙

「土潤溽暑」

撮影：生津勝隆

出穂を待つ、神領大久保集落の棚田の風景。
遠くには、焼山寺山を望む。

神山のサポートについて

グリーンバレーの活動は、皆様からのご支援によって支えられています。
私達の活動趣旨にご賛同いただき、暖かいご支援をぜひお願いいたします。
詳しくは以下のページをご覧ください。
https://www.in-kamiyama.jp/donation-to-greenvalley

発行／お問い合わせ
認定特定非営利活動法人グリーンバレー
https://www.in-kamiyama.jp/npo-gv/
MAIL: greenvalley@in - kamiyama.jp
〒771 - 3310　徳島県名西郡神山町神領字中津 132
TEL: 088 - 676 - 1178
（編集：ニイチ トセ）

GREENVALLEY,INC.

2020年8月10日発行

認定NPOグリーンバレーに携わる人たちの想いを伝えるニュースペーパー「グリーンバレージャーナル」

GREENVALLEY JOURNAL

August 2020　vol.10

山あいの町のアートプログラム「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」#2

山あいの町のアートプログラム 「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」#2

〜 町民がアーティストと育む4つのプロジェクト 〜

8月号特集は、認定NPOグリーンバレー（GV）事業の双璧の一つ「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」第2弾です。
GVは設立以来20年にわたり、「芸術」と「環境」の2事業を中心に新たな施策にも挑戦し続けています。
GV設立以前も神山のまちには国際交流が自然と根付いていたことは過去に触れました。KAIRはその交流のスピリットを受け継ぎ、もたらされた芸術と融合し、神山の地域文化となっています。
今号では、これまで60名を超える国内外のアーティストが参加し、神山で思い思いの制作活動を行うKAIRの各プロジェクトについてご紹介します。

※GVジャーナルのバックナンバーは「イン神山」をご覧ください。

アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）

今年22回目となるGVの芸術事業「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」は、徳島県神山町の国際交流に端を発する国際的なアートプログラム。
20年を超えて町民によって育まれてきたKAIRは、メインとなる「KAIR」公募プログラムと、4つのプロジェクトから構成される。

KAIR公募プログラム（1999年スタート）

https://www.in-kamiyama.jp/art/

国内外のアーティストを対象に渡航費、制作材料費、滞在費などがサポートされる。毎年5月下旬に「KAIR実行委員会」が100名余りの応募からアーティスト約3〜5名を選考する。選ばれたアーティストは8月下旬から約2か月間神山に滞在。10月下旬〜11月上旬に開催される「作品展覧会」を目指し、神山での暮らしのなかで作品を制作する。

❶ ベッド&スタジオ（2008年スタート）

https://www.in-kamiyama.jp/art/bed-studio/artist/

自費版KAIR。アーティストが自らの日常環境から離れ、作品や自分自身に向き合う自立したリサーチベースのプロジェクト。新しい手法や素材を取り入れた実験的な制作を行ったり、アーティスト自身の展覧会に向けて神山で作品を制作、各地での展覧会でその作品を発表したりと、制作という過程にフォーカスしつつ次の可能性へ発展させる試み。年々神山に再来訪するアーティストが増えており、2回でとどまらず、3回、4回と継続して訪れるアーティストも多い。ベッド&スタジオ参加アーティスト8名のうち6名が再訪アーティスト（2019年時点）。

❷ リターンアーティスト（2017年スタート）

https://www.in-kamiyama.jp/art/tag/returnartists

過去にKAIRに参加したことのあるアーティストを再度招聘し、滞在制作を行ってもらう。KAIRを継続する中で、アーティストや関係者、そして町全体に見られる短期的・中期的・長期的な成果や影響があることを踏まえ、原則として初回訪問から10年以上が過ぎたアーティストと共に前回の滞在を振り返り、その後の彼らの活動や神山での経験がもたらした影響などについて、スタッフや町民の方々と共有し、これからのKAIRについて考えるきっかけとする。

❸ KAIRxABCDEF（2019年スタート）

https://www.in-kamiyama.jp/tag/KAIRxABCDEF

KAIRやベッド&スタジオ、リターンアーティストの各プロジェクトを通して再訪するアーティストたちとの対話から生まれた。アーティストも運営側も、地域コミュニティへの思いや関わりがより深いものになる長期的な共同プロジェクト。伝統工芸や伝統文化の継承や提案など、世界に向けた神山や徳島の文化の発信を視野に入れたアートとのコラボレーションを考える。

- Ⓐ Art/Architecture（建築）
- Ⓑ Base（ベース）
  「KAIRの基地（展示スペース・アートスペース）」を創るプロジェクト。アーティストからの要望も多く、訪れる建築ベースのアーティストもこのプロジェクトに協力的に参加している。現在あらゆる可能性を妄想中…。
- Ⓒ Culture（文化）
- Ⓓ Documentation（記録）
- Ⓔ Education（教育）
  KAIRプログラムに含まれる「課外授業」。2019年初めて町外の養護学校にて実施。
- Ⓕ Food（フード）

❹ 神山から世界へ（国内外）（2007年スタート）

https://www.in-kamiyama.jp/art/tag/kairtotheabroad

神山で制作された作品が国内外の展覧会や国際芸術祭で展示される機会も増えている。KAIRをきっかけにアーティスト同士のネットワークが形成され、お互いのプロジェクトでのコラボレーションなども生まれている。

KAIR全体を通じて、町内での課外授業、オープンアトリエ、食の交流、アートツアーなど、制作期間での町民とアーティストの交流や神山町での滞在制作のプロセスを重視している。神山を訪れ、初めての場所、初めての社会環境、時には見たことも触れたこともない素材に触れた感覚がアーティストの作品制作に影響をもたらす。
KAIR実行委員会事務局担当の工藤桂子（2007年〜）と糸井恵理（2017年〜）が実行委員のコアメンバー、サポートメンバーと共に、町民の皆さんや学校、施設関係の方々からの多種多様な形の支援を得て運営している。
KAIRのこれらプロジェクトには確固たる枠組があるわけではない。アーティストたちはルールにとらわれ過ぎず、アーティスト同士、町民、関係者、そして神山のまちと関わり合いながら、新しいアートの表現をつくっている。繰り返し神山を訪れるアーティストもいれば、神山に居ずしてプロジェクトに寄与するアーティスト、そして自然発生的にこれまでにないKAIRプロジェクトを生み出す最中にいるアーティストもいる。期間の定めも制約もない、古い文化と新しい文化が人と芸術を中心に紡がれ、進化するアートプログラムがKAIRである。

参加アーティスト：累計79名23ヵ国（2019年末時点）
訪問者数：累計約4,400名（2019年春〜秋の期間中）

これまでの各プロジェクトに参加したアーティストからピックアップしてご紹介します。

❶ ベッド&スタジオ

Yamandu Roos／ヤマンドゥ・ロース

［2018年招聘アーティスト］

2017年のベッド&スタジオに参加したヤマンドゥ・ロース氏、通称ヤマちゃん。写真家の彼は約3か月の滞在中、町内を駆け巡り、神山の「今」を撮影した。町の中のあんな顔やこんな顔、様々な風景。オープンアトリエで展示された写真を通して、ヤマちゃんの見ていた神山が幾つもの層となって現れた。その後も2018年、2019年と訪問を重ね、現在もプロジェクトは進行中。

2018年、上角にて畑仕事へ向かう方を撮影する様子。

ニック・クリステンセン氏は2013年に始めて招聘アーティストとして来町してから、2年に一度ベッド&スタジオを利用し、家族で滞在制作に訪れている。写真は2015年下分アトリエ作業風景。

❷ リターンアーティスト

Strijdom van der Merwe ／ストレイダム・ファン・ダ・メルヴェ

［2003年招聘アーティスト］

2003年招聘アーティストのストレイダム氏。彼が大粟山に作品を作りはじめたことをきっかけに、その後15年の月日の中作品がひとつひとつ増えていき、現在では17作品が点在するアートウォークへと変化した。2003年当時、ストレイダム氏は何点もの作品を大粟山に作ったが、置かれた場所は様々で、その作品を見るためには草をかき分けて辿り着かねばならなかったとか。この山の中の作品作りがきっかけとなり、間伐や草刈りを行う「森づくり」も2005年からスタートした。2017年リターンアーティストプロジェクトの1人目は満場一致でストレイダム氏に決まり、14年ぶりの来町となった。

2018年、再び神山を訪れたストレイダム氏は、大粟山はじめ町内数カ所に作品を制作した。どの作品も自然素材のみを配置し自然環境に干渉しないもので、特に下分の川辺に石を積み上げて作った作品は、雨の後の増水によって流失してしまうなど、常に同じ状態で見えることのない一期一会の作品となった。

❸ KAIR × ABCDEF

■KAIR × C（Culture／文化）

Kim Boske／キム・ボスケ

キム・ボスケ氏は2018年、2019年と神山で制作を行った。滞在中に出会った藍染に強く惹かれ、自身の写真作品と藍染のさらなる可能性を追求していく中で、神山から始まる作品シリーズへと展開していった。2回に及ぶ滞在制作を通じ、県内の同世代の職人たちとの関係を深め、現在もアムステルダムのアトリエで藍建てをし、シリーズ作品を制作中。2021年には、前回同様に家族と共に来町する予定で、下分アトリエを拠点に活動しながら、発表の場を持つことを計画している。

2018年下分アトリエにて、雨乞いの滝から始まった作品シリーズのお披露目の様子。様々な角度や場所から撮影した雨乞いの滝の写真を幾層にも重ねたイメージが和紙に印刷され、藍のグラデーションに染め上げられたもの。

■KAIR × E（Education／教育）

Liz Roth／リズ・ロス ［2003年招聘アーティスト］

KAIRの課外授業から派生したプロジェクト、KAIR×E（Education 教育）。2019年の7月には神山を飛び出し、徳島市内の支援学校にて、2003年KAIR招聘アーティストのリズ・ロス氏が来日したタイミングで実施。ロス氏の明るい性格も手伝って、生徒たちはアートの授業と国際交流を楽しんだ。3日間のワークショップ期間中は施設のあちこちで生徒達が自然に発する英語が聞こえていたとか。

ロス氏の提案したテーマに沿って子供たちが思い思いに描き、それら一枚一枚丁寧に配置しロス氏のドローイングと共に一つの絵として構成した作品。

❹ 神山から世界へ（国内外）

Ivan Juarez／イヴァン・フアレス［2017年招聘アーティスト］

2017年、フアレス氏が制作した大粟山13点目となる作品と、神山町上分江田で制作した作品が、シカゴ・アテネウム・建築とデザインミュージージアム国際建築賞をはじめ、セルビア、イタリアの4つの団体から表彰された。
※上分江田の作品は、稲刈り前の棚田に制作された期間限定の作品で、記録のみ残っている。

IN BETWEEN -hinoki+sugi pavilion, 2017 写真提供：Ivan Juarez

Marijn van Kreij／マライン・ファン・クレイ

［2016年招聘アーティスト］

2016年に課外授業として神領小学校3、4年生の児童と制作した作品が、海を渡りオランダのマレス美術館で彼の新作と合わせて発表された。授業は、クレイ氏の制作と同じ手法に児童たちが挑戦したもので、有名絵画の一部分を抽出し、モチーフとして繰り返し描写したものを並べ、ひとつの作品に仕上げた。

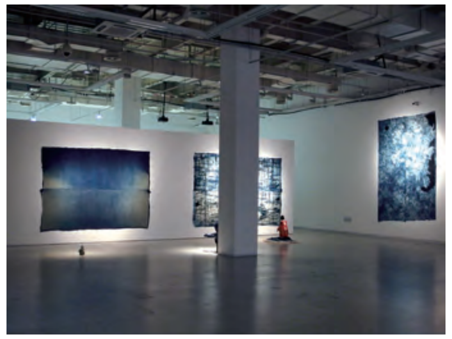
体育館での制作の様子。当時の神小課外授業の詳しいレポートはこちら。
［イン神山］https://www.in-kamiyama.jp/art/archives/30041

個展 2018 Nude in the Studio, マレス、オランダ

Adam Avikainen／アダム・アヴィカイネン

［2010年招聘アーティスト］

2010年に神山にて制作した藍染の作品と、阿川のかかし、阿波木遇を配置したインスタレーション。現在も神山町農村環境改善センター3階に常設されている作品が、フレームから外されて、神山・徳島の文化と共に上海の広大な展示会場に空間を構成した。
かかしは、「阿川28歩の会」の皆さんが作られたもので、アヴィカイネン氏が数ある中から一体だけ、おじいさんのかかしを選び、「阿波十郎兵衛屋敷」所有のお鶴と共に中国へ連れ出した。



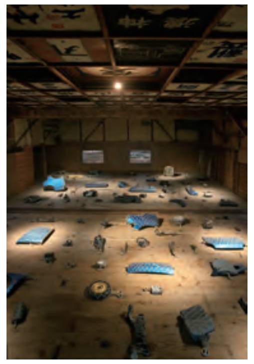
Blurry Compost's Steam Engine, 第10回上海ビエンナーレ、中国 2014
写真提供：Adam Avikainen

Claire Healy & Sean Cordeiro／クレア・ヒーリー&ショーン・コルデイロ ［2015年招聘アーティスト］

伝統的な日本の包装技法を用いて、解体した自動車のパーツをひとつずつマクラメ編みで包みこんだインスタレーションは、消費文化を代表するモノのライフサイクルに焦点を当てた、二つの異なる時代を融合した作品となった。2015年に神山で制作、KAIR2010-2017報告書の表紙を飾った作品を出展。印象的だった寄井座での展示とはまた違った雰囲気の中、美術館の白い空間で壁一面に再構築された。

アデレードビエンナーレ（オーストラリア）での展示。

We Hunt Mammoth,
アデレードビエンナーレ、
南オーストラリア州立美術館、
オーストラリア 2018
撮影：Saul Steed



寄井座での展示。

We Hunt Mammoth
我々はマンモスを獲るべし 2015
撮影 ：小西啓三

出月秀明 ［2012年招聘アーティスト］

2012年招聘アーティスト出月氏と、ベッド&スタジオで神山を訪れているピーター・グランサー氏は神山で偶然に出会い、交流を深めた。その後2016年ドイツはシュトゥットガルトでグランサー氏の主宰するアートスペース、「ITO」にて合同プロジェクトが実現。建物の裏と建物の隙間にある、置き去りにされた三角地を利用し作られた茶室のような建築物で、巡礼のための場所、または積極的孤独を楽しむ空間として作られた。

撮影：Peter Granser /
ITO project space

撮影：出月秀明

"A Solitufe of Place" at the hidden garden of ITO project space
Stuttgart/Germany ドイツ　2016
By Idetsuki Hideaki in cooperation with the students of University Stuttgart Sofia Holder, Lukas Gesell, Tara Hariri, Iván Camilo Nieto, Maximilian Schäfer, Benjamin Vetter, Alp Yilmaz – and IRGE /
e1nszue1ns